

新人弁護士、AIを食む

会員 関 菜穂

1 はじめに

この度、77期リレーエッセイの最終回を担当させていただくことになりました。これまで77期の皆様が、それぞれの経験や思いを綴ってこられた大切な連載の締めくくりをお任せいただくこととなり、大変恐縮しております。何を書こうか悩みましたが、私が弁護士として1年ほど働いてきた中で感じた、AIとの向き合い方について、新人アソシエイト弁護士の視点から書いてみたいと思います。

2 AIを食み、成長する

弁護士になってから、日々の業務の中で、AIに触れる機会が想像したよりも多く驚きました。判例や文献の調査、書面のたたき台の作成、長い資料の要約、メール文案の作成など、AIによって効率化できる場面は多くあります。

私自身も、業務の補助としてAIを利用しています。私は社会人経験を経ずに弁護士になったため、いわゆる社会人としての「型」がほとんど身についていませんでした。メールで「平素より大変お世話になっております」の次に何を書けばよいか分からず、画面の前で手が止まっていました。

そのようなとき、AIはとても心強い存在でした。伝えたい内容を入力すると、もっともらしい文章がすぐに返ってきます。当初は、便利な道具に頼っているだけで、自分自身は何も成長していないのではないかと後ろめたさもありました。

ところが、何度もAIの文案を読み、その文案を自分なりに修正しているうちに、「この場面ではこの表現が自然だ」「ここは丁寧すぎてかえって回りくどい」「この書き方では意図が伝わりにくい」といった感覚が、

少しずつ身についた気がしています。AIは単に仕事を肩代わりするものではなく、自分の表現力や思考力を鍛える相手にもなり得るのだと気がきました。

一方で、弁護士の仕事がAIに取って代わられる不安もあります。定型的な作業は、今後さらにAIが担うことになり、アソシエイト弁護士の需要はなくなっていくことでしょう。そのとき、弁護士として自分に何ができるのかは、考え続けなければならない課題です。

私が今大切にしたいと思っているのは、新しい技術を学び、何をAIに任せ、何を自分で判断すべきかを見極め、適切に使いこなす力を磨くことです。AIを使って業務を効率化することと、自分自身の能力を高めることは、決して矛盾しないと思います。むしろ、AIを通じて得た気付きや違和感を一つ一つ自分の中に蓄積していくことで、文章力、調査力、判断力を磨くことができると思っています。

3 最後に

ところで、ここまで読んでいただいたこの文章も、実はAIに相談しながら書いた文章です。そう書くと、少し身もふたもないように聞こえるかもしれません。しかし、AIから返ってきた言葉の中から、何を自分の言葉として残すのかを考えたのは、私自身です。

AIが作った文章なのか、私が書いた文章なのか。その境界は、これからますます曖昧になっていくのかもしれませんが、それでも依頼者と向き合い、最後に責任を引き受けるのは弁護士自身です。新人弁護士として、変化を恐れすぎず、道具に頼りすぎず、AIとともに学びながら、自分の言葉と判断で依頼者に向き合える弁護士になれるよう、日々研鑽を重ねてまいる所存です。